

## 優れた生産技術が生み出す高品質牛乳の直販を取り入れた酪農経営



神田 豊広 (かんだ・とよひろ)

神田 麻子 (かんだ・あさこ)

新潟県阿賀野市

《認定農業者》《家族経営協定》

### 推薦理由

当経営の所在する阿賀野市は「新潟県酪農発祥の地」として、県内の酪農の先導的な役割を果たしており、現経営者である神田豊広氏は酪農3代目として、父から平成5年に経営を引き継ぎ、強固な経営基盤の確立と自家産牛乳のブランド化によりさらに経営を発展させている。

本人は、地域の民間会社社長が会社役員、若手後継者等の経営勉強会を行うための組織としてつくった「阿賀ビジネスサークル」に平成15年から参加し、乳価の低下傾向が続く酪農の経営発展方向を自家産牛乳の付加価値販売に求め、平成20年に、地域の牛乳販売業者の協力を得て、自家ブランド牛乳（やすだ愛情牛乳）の委託製造、販売を実現した。

平成21年には、乳類販売業の営業許可を取得し、牛舎脇に直売所を設置して消費者への直接販売に取り組んでいるほか、牛乳、乳製品の宅配とともに、インターネットホームページでのPR、メール会員の募集や自らの積極的な営業活動により販路拡大を図っている。

その結果、地域の洋菓子店と連携したヨーグルトプリン、生キャラメル、ソフトクリーム等の加工品の開発や地元の村杉、咲花、月岡温泉のホテル等に豆腐やケーキなどの食材として自家ブランド牛乳の納入も実現した。

この「やすだ愛情牛乳」と「神田酪農」のブランド力の強化を図るため、現在、商標を出願中であり、地域のテレビ、新聞等のメディアでも紹介されるようになり知名度が向上しているが、「おいしい牛乳をお客様に提供すること」を理念とし、牛を健康に飼うことを第一に考えて、牛の快適性に配慮した飼養管理を徹底している。

そのための取り組みとして、まず給水面で以前の井戸水からミネラル水に切り替えたことにより、乳牛の水の吸収が良くなり、牛が健康になるとともに、すっきりとした甘さとコクのある飲みやすい牛乳が生産されている。

さらに、飼養管理面では、カウトレーナーの設置による牛床の乾燥化、こまめな削蹄の実施により関節炎の予防や牛体（特に乳房）の汚れを防止し、衛生的な搾乳を可能にしている。また、平成 18 年には、自動離脱装置付きのミルクカーの導入、ミルクカー搬送レールを利用した後ろ搾り方式に切り替え、労力と搾乳時の牛のストレス軽減を図っている。

これらの、取り組みにより生乳中の体細胞数は年間平均で 10 万個/ml に低減され、平成 18 年には新潟県が推進している「畜産安心ブランド生産農場（クリーンミルク生産農場）」に、新潟県畜産協会から認定されるとともに、繁殖管理面でも 1 回授精による受胎率が 89.2% と非常に高くなり、13.2 ヶ月という安定した分娩間隔を実現している。

一方、牛群改良面においては、平成 5 年に本人が就農すると同時に、中止していた牛群検定を再開し、平成 16 年からは酪農経営データベースに加入して、分析結果を活用した牛群の改良を進めてきた。その結果、過去 5 年間の経産牛 1 頭当たり年間乳量は 1 万 1000kg に向上し、県内ではトップクラスの高能力牛群が整備され、経産牛 1 頭当たり所得 21 万 2000 円という高い経営成果に結びついている。

また、自給粗飼料確保にも積極的に取り組み、借地を中心に 11.3ha で混播牧草を栽培し、全てラップサイレージに調製して通年サイレージ給与を達成している。さらに、経営内から排出されるふん尿は共同たい肥センターを 100% 活用してたい肥化を行い、地域の環境保全型農業の推進に貢献している。

現在、自然と動物を通して、子どもが遊んで学べる牧場をつくり、想像力豊かに育てたいとの思いから、地域交流牧場全国連絡会に加入し、酪農教育ファームファシリテーターの認証を受けて、開かれた牧場作りにも努めている。

以上のように、しっかりとした酪農経営基盤を確立し、その基盤の上に立った自家ブランド牛乳の生産、販売への取り組みは、先進的モデルとして他の経営への波及効果が大きいことから、当経営を推薦するものである。

(新潟県審査委員会委員長 楠原 征治)

## 発表事例の内容

### 1 地域の概況

阿賀野市は新潟県の北東部に位置し、平成 16 年 4 月 1 日に 2 町 2 村が合併して誕生した。

総面積は 192.7 km<sup>2</sup>、人口は約 4 万 8000 人で、神田牧場のある旧安田町は国道 49 号線が南北に縦断し、県都新潟市からは 20km の距離にあるが、磐越自動車道安田インターチェンジが設置され、交通体系が整っている。

白鳥の飛来地として国の天然記念物に指定されている瓢湖<sup>ひょうこ</sup>には、毎年約 5000 羽の白鳥が訪れ、また、6 月の「あやめまつり」や夏のハス等、四季折々の花が楽しめるため観光客でにぎわっている。

同市は、冬期間でも最高積雪が 85cm 程度と日常生活に支障が出ることはないが、春から

秋にかけて、断続的に吹き荒れる局地風「ダシの風」が米作りに時として甚大な被害をもたらすため、地域には酪農が定着し、共同サイロの建設、飼料作物生産への取り組みがなされている。

特に、旧安田町では大正9年に「牛乳販売利用組合」が設立され、「新潟県酪農発祥の地」として古くから酪農が盛んに行われ、乳用牛の改良や乳牛共進会等を通じて新潟県の酪農主産地として先導的な役割を果たしてきている。

昭和62年には酪農家有志により、生乳を原料とした飲用ヨーグルトの生産を行う「ヤスダヨーグルト」が設立されて全国ブランドまで成長し、地域を代表する特産品となっている。

また、平成8年には地域の家畜排せつ物を共同で処理する「グリーンアクアセンター」が稼動して環境保全と土づくりに大きく貢献しており、平成12年に「ゆたかな畜産の里」として旧安田町が農林水産省生産局長賞を受賞する等、地域一体となった取り組みを展開している。

(1) 産業構造 (平成17年)

区分	総数	産業別分類		
		第一次産業	第二次産業	第三次産業
就業人口	23,812人	2,733人	8,745人	12,334人
構成比	100%	11.5%	36.7%	51.8%

(2) 農業産出額 (平成18年)

(単位：千万円)

農業産出額	米	畜産物	野菜類	花き	豆類	いも類	果実	その他
1,061	782	200	48	14	8	4	3	2
100%	73.7%	18.9%	4.5%	1.3%	0.7%	0.4%	0.3%	0.2%

(3) 飼養戸数、頭数 (平成21年)

(単位：戸数・戸、頭数・頭)

区分	乳用牛		肉用牛	
	戸数	頭数	戸数	頭数
新潟県	307	10,269	325	12,700
阿賀野市	26	1,052	20	2,090

## 2 経営・生産の内容

### 1) 労働力の構成（平成 21 年 7 月現在）

区分	経営主との 続柄	年齢	農業従事日数（日）		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
家族	本人	38	340	340	酪農（作業全般）、 稲作	
	妻	40	330	330	酪農（搾乳、哺乳）、 乳製品配達	
	父	65	330	330	稲作、 酪農（育成牛管理）	
	母	61	100	30	乳製品配達	
常雇						
臨時雇	延べ人日			50 人	酪農（搾乳、飼料給与）	

### 2) 収入等の状況（平成 20 年 1 月～12 月）

（単位：円）

項 目		金 額	備 考
酪農 収入	生乳販売	45,009,770	
	初生牛販売	1,780,775	25 頭
	育成牛販売	350,000	1 頭
	経産牛販売	821,567	7 頭
	奨励・補てん金等	3,383,496	
	乾草・たい肥		
	共済金		
	その他	670,876	
計		52,016,484	
農外収入			

### 3) 土地所有と利用状況

区分		実面積 (ha)		飼料生産利用延べ面積 (ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田	0.5			
	転作田	5.0	4.6	5.0	4.6
	畑	5.4	3.9	5.4	3.9
	未利用地				
	計	10.9	8.5	10.4	8.5
草地	個別利用地				
	共同利用地	0.9	0.9	0.9	0.9
	計	0.9	0.9	0.9	0.9
野草地					
山林原野					

4) 自給飼料の生産と利用状況 (平成 20 年)

使用 区分	飼料の 作付体系	面 積 (a)		所有 区分	総収量 ( t )	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	延べ面積			
採 草	オーチャードグラス イタリアンライグラス 混播	1,130	3,390	自己 195a 借地 935a	475t	サイレージ

## 5) 経営の実績・技術等の概要

### (1) 経営実績（平成 20 年 1 月～12 月）

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族	3.2 人
			雇用	0.2 人
	経産牛平均飼養頭数			43.3 頭
	飼料生産用地延べ面積			3,390 a
	年間総産乳量			421,265 kg
	年間総販売乳量			420,965 kg
	年間子牛販売頭数			25 頭
	年間育成牛等販売頭数			1 頭
収益性	酪農部門年間総所得			9,164,291 円
	経産牛1頭当たり年間所得			211,646 円
	所得率			19.4 %
	経産牛1頭当たり	部門収入		1,088,696 円
		うち牛乳販売収入		1,039,487 円
		売上原価		1,013,513 円
		うち購入飼料費		616,983 円
うち労働費		219,058 円		
		うち減価償却費	110,120 円	
生産性	牛乳生産	経産牛1頭当たり年間産乳量		9,729 kg
		平均分娩間隔		13.2 カ月
		受胎に要した種付回数		1.1 回
		牛乳1kg当たり平均価格		106.8 円
		乳脂率		3.56 %
		無脂乳固形分率		8.76 %
		体細胞数		10.6 万個/ml
		細菌数		0.9 万個/ml
	粗飼料	経産牛1頭当たり飼料生産延べ面積		78.3 a
		借入地依存率		82.7 %
	乳飼比(育成・その他含む)			59.4 %
	生乳100kg当たり差引生産原価			9,910 円
	経産牛1頭当たり投下労働時間			155 時間
安全性	経産牛1頭当たり借入金残高(期末時)			85,636 円
	経産牛1頭当たり年間借入金償還負担額			20,942 円

## (2) 技術等の概要

地帯区分	平地農業地帯	
飼養品種	ホルスタイン	
後継者の確保状況	有(本人が後継者)	
飼養 ・搾乳	飼養方式	対尻式タイストール
	搾乳方式	パイプライン、後搾り方式
	牛群検定事業	有
飼料	自家配合の実施	無
	TMRの実施	有
	通年サイレージ給与の実施	有
	食品副産物の利用	無
繁殖 ・育成	ETの活用生産の実施	有
	F <sub>1</sub> 生産の実施	有
	カーフハッチの飼養	無
	採食を伴う放牧の実施	無
	経産牛の自家産割合	83%
販売	加工・販売部門の有無	有(自家ブランド牛乳、加工品、水素水、マスク等健康用品)
	地産地消の取り組み	有
その他	肥育部門の実施	無
	協業・共同作業の実施	有
	施設・機器等共同利用	有
	共同堆肥センターの利用	有
	ヘルパーの活用	有
	コントラクターの活用	無
	公共育成牧場の利用	有
生産部門以外の取り組み	有	

## 6) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	成牛舎、育成牛舎、乾乳舎、飼料庫、機械格納庫、堆肥舎
機械・器具	パイプラインミルクカー(自動離脱装置付き)、ミルクカー搬送レール、バルククーラー、バークリーナー、トラクター、ロールベラー、ヘイベラー、ベールラッパー、テッター、ヘイメーカー、マニュアルスプレッドほか

## 7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

### (1) 処理の内容

処理方式	全て分離
処理方法	ふんは、毎日、地域の共同たい肥センターに搬入する。 尿は、月2回、地域の共同たい肥センターに搬入する。
敷料	吸水性を考慮して、経産牛はモミガラ、育成牛はオガクズ、子牛は稲わらを利用する。

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等
販売	100	バラ・バッグ、袋詰でたい肥センターが販売する。
交換		
無償譲渡		
自家利用		



### 3 経営の歩み

#### 1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
大正9年	稲作・酪農	2頭		祖父が中心となって、県内ではいち早く、六野瀬地区牛乳販売利用組合を設立し、ホルスタイン種2頭を導入して酪農を開始する。
昭和36年	酪農・稲作	10頭		父、酪農に従事する。
〃 49年	酪農・稲作	15頭	3ha	祖父から父が酪農経営を引き継ぐ。
〃 51年	酪農・稲作	30頭	5ha	40頭収容牛舎を新築し、規模拡大を図る。
〃 54年	酪農・稲作	30頭	5ha	育成牛舎を新築し、本格的に育成に取り組む。
平成3年	酪農・稲作	36頭	5ha	本人、短期大学を卒業し、北海道根室で7ヵ月間酪農研修を実施する。 11月に下越酪農協同組合の臨時職員となる。
〃 5年	酪農・稲作	36頭	8ha	臨時職員を退職し、本格的に酪農に従事する。 中止していた牛群検定を再開する。
〃 6年	酪農・稲作	36頭	8ha	補助事業を活用し、3戸共同でロールベアラ等を導入し、牧草サイレージ体系とする。
〃 11年	酪農・稲作	40頭	8ha	乾乳牛舎を新築し規模拡大を図る。 ミネラル水の給水を開始する。
〃 15年	酪農・稲作	40頭	8ha	第10回中部日本ホルスタイン共進会に県代表として出品し、経産牛のベストアダーを受賞する。 阿賀ビジネスサークル（異業種交流会）に参加し、自家産牛乳の販売の検討を開始する。
〃 16年	酪農・稲作	40頭	8ha	父母、妻と家族経営協定を締結する。
〃 17年	酪農・稲作	42頭	8ha	父から酪農経営を移譲される。 本人、認定農業者として認定される。
〃 18年	酪農・稲作	43頭	8ha	個体乳量が11,000kg以上を継続したことから、パートを雇用し3回搾乳を開始する。第27回新潟県ホルスタイン共進会で最高位賞を受賞する。 新潟県畜産協会認定のクリーンミルク生産農場となる。
〃 19年	酪農・稲作	39頭	10ha	飼料価格高騰により、パート人件費を削減するため12月から3回搾乳を2回に変更する。 第27回新潟県ブラック&ホワイトショウでチャンピオンを獲得する。
〃 20年	酪農・稲作	43頭	11ha	牛乳販売業者と連携し、自家ブランド牛乳（やすだ愛情牛乳）、乳製品の販売を開始する。 第28回新潟県ホルスタイン共進会で県知事賞を受賞する。
〃 21年	酪農・稲作	46頭	11ha	やすだ愛情牛乳等の商標を出願する。 乳類販売業の営業許可を取得し、牛舎に隣接した販売所を設け、牛乳、乳製品、天然水素水等の直接販売を開始する。

## 2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
畜産部門労働力実員数(人)	4	4	4	4	4
経産牛飼養頭数(頭)	40.2	41.8	42.8	38.8	43.3
販売・出荷量等(kg)	451,057	473,800	470,373	450,821	420,965
畜産部門の総売上高(円)	47,790,089	50,628,130	50,130,157	48,880,675	47,140,545
主産物の売上高(円)	45,355,187	47,457,248	47,695,255	47,009,876	45,009,770

## 4 特色ある経営・生産活動の内容

### 1) 自家ブランド牛乳等の販売

乳価の低下傾向が続く酪農経営の経営発展方向を自家産牛乳の付加価値販売に求め、地域の民間会社社長が会社役員、若手後継者等の経営勉強会を行うための組織としてつくった「阿賀ビジネスサークル」に平成15年から参加し、酪農経営方針や経営理念について勉強するとともに、異業種交流により人脈を築いた。

次の2の項以降で述べるように、優れた生産技術を有し、しっかりとした酪農生産基盤を確立した上で、愛情を込めて育てた牛から搾った生乳を自信を持って多くの人に飲んでもらいたいとの思いを、平成20年に牛乳販売業者の協力を得て自家ブランド牛乳(やすだ愛情牛乳)の委託製造、販売に結びつけている。

牛乳は宅配を中心として直売所、新潟県庁内の生協、観光施設等で販売しているほか、洋菓子店と連携してヨーグルトプリン、生キャラメル、ソフトクリームなどの加工品としても販売している。

また、地元の村杉温泉、咲花温泉、月岡温泉のホテル等に豆腐やケーキなどの食材として自家ブランド牛乳を提供し、付加価値をつけた販路拡大に努めており、現在、「やすだ愛情牛乳」「神田酪農」の2つの商標を出願し、ブランド力の強化に向けた取り組みを進めている。

一方、消費拡大を図るため、インターネットホームページを開設して、牧場、牛乳の紹介、メール会員の募集、注文の受付を行っている。

平成21年には、乳類販売業の営業許可を取得し、牛乳、乳製品等の宅配、牛舎脇の直売所での販売に取り組んでいる。その結果、現段階で販売部門での所得は、年間120万円程度が見込める状況となっている。

さらに販売量を拡大するため、自ら営業活動を実施するとともに、観光イベント等にも積極的に参加し、消費者と直接交流することにより、牛乳消費拡大への働きかけを行っている。

### 2) アニマルウェルフェアを重視した良質乳生産

神田酪農は、大きな愛情を持って牛を育て、「とってもおいしい愛情牛乳」をお客様に提供することを理念としており、そのために、牛の快適性に配慮した飼養管理を徹底し

て行い、高い生産技術により牛を健康に飼うことを第一として取り組んでいる。

まず、平成 11 年に、それまで給水に使っていた井戸水を上水道に切り替え、200 万円近い投資により、ミネラル水を供給する設備を設置している。そのことにより、水の吸収が良くなり、牛が健康になるとともに、すっきりとした甘さとコクのある飲みやすい牛乳が生産されている。

搾乳牛の管理面では、カウトレーナーの設置による牛床の乾燥化、さらには、こまめな削蹄の実施により関節炎の予防や牛体（特に乳房）の汚れを防止し、衛生的な搾乳を可能にしている。平成 18 年には、自動離脱装置付きのミルクカーを導入して、ミルクカー搬送レールを利用した後ろ搾り方式に切り替え、乳房により近い場所で搾乳することにより、労力と搾乳時の牛のストレス軽減に努めている。また、体調の悪い牛は早期に発見し、症状が悪化する前に獣医師による診断、治療を実施し、健康面には特に気を配っている。

これらの取り組みにより、生乳中の体細胞数は年間平均で 10 万個/ml に低減され、平成 18 年に、新潟県が推進している「畜産安心ブランド生産農場（クリーンミルク生産農場）」に認定されている。

さらに、牛が健康になったことにより、繁殖管理面において発情が明瞭となり、1 回授精による受胎率が 89.2% と非常に高く、分娩間隔も 13.2 カ月（新潟県指標値 13.5 カ月以内）を達成している。このことにより、繁殖管理に費やす時間を短縮することが可能となり労働生産性の向上につながっている。

### 3) 牛群改良による高能力牛群の整備

乳牛改良に熱心に取り組んでおり、本人が本格的に酪農に従事した平成 5 年に、中止していた牛群検定を再開するとともに、牛群審査の受検や平成 16 年からの酪農経営データベース加入を通じて、データに基づいた牛群改良を進めてきている。

また、本人は家畜人工授精師免許、家畜体内受精卵移植免許を取得し、受精卵移植技術を活用した後継牛の確保、和牛子牛生産にも取り組んでいる。

その結果、経産牛のうちの自家産牛割合は 83% となり、過去 5 年間の経産牛 1 頭当たり年間乳量は 1 万 1000kg まで向上し、平成 18 年から 19 年までの 2 年間は、従業員を雇用して 3 回搾乳をとり入れている。

平成 20 年は、飼料価格高騰により収益性が低下したことから、雇用労働費を削減するため 2 回搾乳に戻したことと、自家育成牛の初産分娩が多かったことから経産牛 1 頭当たり乳量は一時的に 9700kg まで低下しているものの、牛群検定結果による産次別の平均乳量をみると、初産牛は 8432kg、2～6 産牛は 1 万 184～1 万 3441kg と高い能力の牛群を維持している。

さらに、乳量の改善とともに、体型（特に乳房付着）の改良も一体的に進めており、乳頭損傷による乳房炎の発生が減少し、良質乳生産に結びついている。

近年では、平成 15 年に第 10 回中部日本ホルスタイン共進会で新潟県代表として出品し、ベストアダーを受賞しているほか、平成 16 年以降も、新潟県ホルスタイン共進会等

において、北陸農政局長賞、県知事賞等の数々の受賞歴があり、県内ではトップクラスの高能力牛群への改良を図り、低コスト生乳生産に結びつけている。

#### 4) 転作田、未利用地を積極的に活用した牧草生産への取り組み

地域内で高齢化などの理由で耕作できなくなった転作田 457a、畑 388a を積極的に借地し、自作地を含め合計 1130a でオーチャードグラス、イタリアンライグラスの混播牧草を栽培し、自給粗飼料の確保に努めている。生産した牧草は、すべてラップサイレージに調製して1番草を経産牛、2・3番草を育成牛に通年給与を行い、粗飼料の1/3を自給して、所得向上に結びつけている。

#### 5) 経営計画に基づいた経営改善の実践

母が複式簿記による記帳を継続して実施してきており、平成16年に父母、本人、妻の4人で家族経営協定を締結してからは、妻が簿記ソフトを利用した経営管理を行い、コスト低減を図っている。

平成19年からの3年間は、新潟県が実施するスーパー経営体農業者等育成普及指導事業の対象経営として選定され、中小企業診断士の経営診断を受診して経営計画を作成し、1000万円以上の所得確保という目標に向けて積極的な経営改善に取り組んでいる。その結果、飼料価格高騰という厳しい情勢の中で、平成20年は経産牛1頭当たり所得21万2000円の実績をあげている。

## 5 地域農業や地域社会との協調、貢献

### 1) 地域の活動

#### (1) 阿賀ビジネスサークル活動

地域の民間会社社長が会社役員、若手後継者等の経営勉強会を行うための組織としてつくった「阿賀ビジネスサークル」に平成15年から参加し、異業種交流を行っている。当初3ヵ月間は、週1回、搾乳時間である夕方5時からの開催であったが、家族の理解、協力やヘルパーの活用により参加することができ、現在も継続して年2回の勉強会に参加している。

このサークル活動を通じて自分の経営方向のヒントを得て、自家ブランド牛乳の販売につなげているほか、築いた人脈を大切に乳製品の製造、販路拡大に結びつけている。

#### (2) わげしょ会活動

若手酪農家の情報交流の場として、地域で若い人のことを指す方言を名称とした「わげしょ会」を立ち上げ、現在16名の会員が地域を越えて参加し、会員の牛舎巡回、講演会、視察、チーズ作りなどの活動を行い、会員相互のレベルアップ、若手会員の育成に努めている。

## 2) 地域循環型畜産の実践

地域内で高齢化などの理由で耕作できなくなった転作田、畑8haを積極的に借地して牧草生産に活用するとともに、地域内で排出されたモミガラを収集して乳牛の敷料として活用している。また、経営から排出されるふん尿は、平成8年に稼動した地域の共同たい肥センターを100%利用してたい肥化処理を行い、耕種農家と連携した土作りによる地域の環境保全型農業の推進に貢献している。その結果、平成12年に「ゆたかな畜産の里」として農林水産省生産局長賞を受賞する等、地域一体となった取り組みにつながっている。

## 3) 研修生受け入れへの取り組み

毎年、家族の協力により新潟県農業大学校の学生1名を研修生として受け入れ、酪農作業体験を通じて農業後継者の育成に努めている。

## 4) 酪農教育ファームの取り組み

自然と動物を通して、子どもが遊んで学べる場をつくり、想像力豊かに育てたいとの思いから、地域交流牧場全国連絡会の会員となり、社団法人中央酪農会議から酪農教育ファームファシリテーターの認証を受けて、牛舎脇に牛乳、乳製品直売所を設置することにより消費者に訪れてもらえる開かれた牧場作りに努めている。

## 5) 牛乳を通じた地域産業との連携

自家産の牛乳を食材とした加工品の開発を行うため、積極的な営業活動により地域の洋菓子店、ホテルと連携し、専門業者のノウハウを活用した商品開発を進め、地域産業との連携強化を図っている。

# 6 今後の目指す方向性と課題

## 1) 牛乳、乳製品の販売量拡大と新製品の開発

現在、自家ブランドとして販売している牛乳が生産量の4割程度であることから、一層、消費者に自分の牛乳生産に対するこだわりを理解し、おいしい牛乳を飲んでもらうため、テレビ、新聞等のメディアの活用、ホームページでのメール会員の募集、地域の商工会などのイベントでの牛乳の試飲販売、イベント賞品としての無償提供、積極的な営業活動の実施などの取り組みにより、牛乳の宅配申込者数や直売所数の一層の拡大を図るとともに、牛乳の好きな人を増やし、牛乳消費量全体の拡大に貢献する。

また、自家産の生乳を使った商品開発を地域の専門業者と連携して行い、消費者に喜ばれ、かつ付加価値の高い加工品の生産、販売を行う。

## 2) 消費者交流活動の継続実施

消費者が気軽に訪れることができる開かれた牧場を目指し、牧場あるいは各種イベントでの消費者交流を積極的に行い、酪農を通じた人とのかかわり合いを大切にして、消

費者から信頼される生産者となる。

### **3) 経営の法人化**

乳類販売業の営業許可を取得し、販売部門が拡大していることから、将来的には生産部門、販売部門を分離して法人化する構想を持っている。販売部門では、現在、乳製品に加えて、健康志向を持っている人に対して富士山の天然水素水、光触媒マスク等の販売を行っており、牛乳を核にした顧客管理を行い、法人化に向けて牛乳、乳製品以外の商品も取り入れて販売部門の拡大を図る。

### **4) 良質乳生産の継続**

消費者に喜ばれるおいしい牛乳を生産するには、牛が健康であることが必要条件であると考えており、飼養管理全般の一層の充実により良質乳生産を継続する。将来的には、乳牛飼養規模は現状を維持する考えであるが、昭和 51 年に建設した成牛舎が 33 年を経過して古くなっているため、牛にとってより過ごしやすい環境の牛舎へ建て替える構想を持っている。

【写真】



牛舎全景



成牛舎内(落ちついた経産牛)



自家育成により高能力牛群を整備



転作田を活用した牧草栽培(11.3ha)



自家ブランド牛乳と加工品



奥さんが牛乳を宅配



菓子店と連携して加工品を製造・販売



消費者交流での牛乳の試飲